

〈研究ノート〉

『隔莫記』以前の鳳林承章の文化的動向

横谷 一子

はじめに

『隔莫記』は相国寺第九十五代住持で、鹿苑寺独住第二世となつた鳳林承章（一五九三～一六六八）の日録である。承章四十三歳の寛永十二年（一六三五）八月二十一日から、七十六歳の寛文八年（一六六八）六月二十八日までの三十四年間にわたる記録である。

寛永十四年三月二十五日の日録には次のような記事がある。

巳刻退出。自廿二日、到今日、於仙洞。三日三夜之御遊興。遊事有拾八色、尤有和漢・詩歌・蹴鞠・楊弓・碁・上懸物・香・其外様々御遊興有。拜領之鬪取、美麗難盡筆頭也。予金子壺歩拾、鬪取之拜領也。自前夕、到今晨、御酒宴。三日三夜、予暫時亦不須眠、三日三夜之間不眠也。五十餘

之衆、皆就眠也。

仙洞に於いての三日三晩にわたる遊興の記録である。この時、後水尾院（一五九六～一六八〇）は四十二歳、承章は四十五歳であった。後水尾院の祖母新上東門院晴子は、承章の叔伯母にあたる。すなわち、二人は従兄甥である。『隔莫記』（第一巻昭和三年―第六巻昭和四二年。赤松俊秀編、鹿苑寺発行、全六巻。平成九年三月二〇日復刻、思文閣発行）の解題に、「上皇とは年が三つ違いで、よほど気が合つたと見えます」とあるように、後水尾院は事あるごとに承章を仙洞御所に呼び寄せている。記録に「其外様々御遊興有」と記す如く、後水尾院と承章の交遊の様子は、『隔莫記』から窺うことができる。また『隔莫記』にはその他、数多の文化活動の跡が見られ、それらの受容形態も知れる。それは、およそ次のようなものである。

近世以前からある古典文芸（雅文芸）としては、和歌をはじめとして、和文・漢文・漢詩・注釈・物語文学（源氏・平家・伊勢各物語等）・法語・縁起絵図・能・狂言・幸若舞・中世歌謡・讃・書・茶・香・琴・尺八・蹴鞠・囲碁・象戯・双六（絵双六）・絵画・彫刻等である。

近世興起（俗文芸）のものとしては、俳諧・歌舞伎・浄瑠璃（操浄瑠璃）・近世歌謡・三味線等である。その他、狂歌・狂詩・狂句・和漢等、また、陶芸・塗器・竹細工等の工芸、祭・競馬・通し矢等の記録もみえる。「隔莫記」では、以上の文化的活動の大半は、後水尾院、天皇（明正・後光明・後西・靈元）を中心に堂上貴族、門跡などの貴人間で遊戯されている。いうまでもなく、鳳林承章はその中心的存在であった。しかし、承章の交遊は、貴人のみに止まらず、武家、町人にも広く及んでいる。

承章は高僧の身であるとともに、文人として、書画（雅号木屑）・造園設計・薬劑・茶・華・讃・鑑定・針灸など、多くのことに通じていた。これらに関する専門的な交遊も一方ならぬものであった。鳳林承章が「当代一級の文化人」と評される所以がここにあるといってもよい。延いては、承章は近世初期の文芸復興の一端を担った一人といっても過言ではなからう。

しかし、そのような承章の文化的活動は『隔莫記』以前の事蹟については殆ど明らかにされていない。

そこで本稿では、当時の記録等に散見する承章の文化的動向

について、可能なかぎりの資料を収集し、若干の考察をこころみた。さらに、承章の文化的活動の足跡をたどることによって、今後の『隔莫記』深層研究の足掛かりとしたい。

(一)

鳳林承章は、その幼年期についても詳らかにはならない。わずかに、『鹿苑日録』に於いて二、三の記録が残るのみである。『鹿苑日録』四十・慶長六年（一六〇一）二月二十一日条に次の記事がある。

廿一、（前略）於奥鹿苑寺尊丈御カ寮有會。

と、当時九歳の有髪御カの雅児承章を「鹿苑寺尊丈」と記す。おそらくこれが『鹿苑日録』初出の承章の記述であろう。同時に承章の記録はこれから始まるといえる。

□寮で行われた会の内容、またその折の役目は何であったのか、記録にもこの後「不及記入」とあり、詳細は不明である。

次に、慶長八年二月十七日条には、

十七、自朝晴天。已刻自相國。丘叔・文嶺・魯雲・早侍者・撰侍者・章公尊丈・岷公・同仙公尊丈光駕。同刻勸修寺宰相殿。同召具之衆。山形衛門太夫・井家・御倉・河内。其外一兩人有之。不及記之（中略）、午時神事相始。能ク

ミ。一番寢覺。二―源氏供養、三―短沢只法。^(忠度)四―文□。^覺
五―合浦。申尾ニ相濟。自宰相殿持參大錫一雙・折箱一ツ。
同尊丈自北□ナリノ箱一ツ・樽二ケ。終日宴遊。々々了。

と、相国寺での神事能開催の様子が窺える。記事には、演目と主な演能者及び能の開始時刻と終了時刻、招待者が記されている。招待者の中に承章の兄勸修寺光豊（二五七五―一六一一）の名前がある。前年の十二月八日父晴豊卿が五十八歳で没しているところから、この日の光豊の参観は、勸修寺家当主として、また、承章の親代りであつたと考えられる。

慶長九年正月二十八日には円光寺座敷に於いて少年衆の「躍り」があつた。

廿二、自朝晴天（中略）尊丈ハ座敷ニナラス、給仕衆撲公・篤侍者・晟侍者・土侍者。其外者皆若衆□歌衆了喜。其外京衆一兩人。少年衆五六人アリ。亂酒之内。躍扑^{ウツ}少人出座。躍三番。躍了テ歸宅之時。躍之少人ニ小袖一ケ。座之者ニ孔口^{方カ}三緡。少年花袈裟無過之。於五條終日雖扑躍。孔方不過一緡。

『日録』は右のように記す。この日、少年衆の躍りを承章は中央正面にて見物している。記事には少年衆がわずかな時間で平常時の褒賞の何倍も受けたことに「一刻ニ^レ如此者非幸也」と、

戒めの一文を副えている。このことは承章たち尊丈に向けての言葉でもあつたのであろう。

この後、慶長十年正月十二日には、「七種香」、同十月五日、同十四年十月十七日、十五年閏二月一日の仏事に承章の名前がみえるものの特筆すべきものはない。ともあれ一例ではあるが、承章は禅僧としての修行の一端として幼少の頃より日常的に芸能に親しむ機会に恵まれていることが知れる。このことは後の文化人承章を形成していく上での根幹となっている筈である。

念日、予也為十九歳。秉拂遷寮

と、十九歳で秉^ヒ拵^ヒになつた承章自からの執筆記事がある。

『鹿苑日録』七十九には、承章の日録「日用集」三冊が所収されている。『鹿苑日録』第六巻の凡例には次のような記述がある。

一、鳳林ノ「日用集」及ビ覺雲ノ「日伴録」ハ何レモ其ノ秉拂記ニシテ。云々

「日用集」三冊は、首座となつた禅僧承章の秉^ヒ拵^ヒ記録であることを示す。「日用集」については、禅僧承章の研究上、注目すべき資料と考えるが、本稿とは趣旨を異にするものなので、一

文の紹介にとどめておく。

慶長十七年十月二十七日、既出の勸修寺光豊が三十八歳の若さで死去する。『日録』は、

廿八日（中略）聞勸修寺中納言訃音、倩才公遣鳳林而弔矣

と記す。また、翌閏十月十日に誓願寺に於いて、葬儀、埋葬が行われたことも記している。右の記述では光豊は中納言とあるが、厳密に言えば、この三日前に権大納言従二位に叙任されている。承章にとっても勸修寺家一門にとってもさぞ無念のことであつたに相違ない。

以上、承章九歳から二十歳までの事跡を『鹿苑日録』から若干みてきた。『日録』には、この後、「有聯句」「講山谷詩」「漢和之會」「詩歌會」等文芸的記述があるものの、いずれも以上の「□」のことを断片的に記述するだけで、何も明らかにしたい。しかし、これ以降の承章の文化的動向については、近世初期に編まれた『泰重卿記』から充分に探ることはできる。

(二)

『泰重卿記』（『史料纂集』95、続群書類従完成会、平成五年）は土御門泰重（一五八六〜一六六二）の慶長二十年正月から寛永十九年（一六四二）八月七日までの記録である。泰重は安倍晴明を祖とする陰陽頭従三位土御門久脩の長子である。土御門家

は、晴明以来陰陽道、天文道をもって歴代朝廷に仕えた。一時期には賀茂氏中絶により、造暦の業も担っていたが、泰重の代に幸徳井友景に譲っていることが、『泰重卿記』元和二年九月十八日、廿九日条に詳述されている。

承章の母雲松院（生年不詳）は、この土御門家の出自であり、久脩の兄弟姉妹である。すなわち、泰重と承章は従兄弟である。以上のことも踏まえ、『泰重卿記』を参看して、泰重との交遊を通して承章の文化的動向を考察してみる。

『泰重卿記』（以下、本稿では底本の原題である『日次記』と記す）に於いて、最初の交遊がみられるのは慶長二十年三月二十一日の一乗院（後水尾天皇実弟）里房での漢和聯句会である。

廿一日、雨晴、漢和聯句興行仕候、一乗院殿御里房借申候、
連衆阿野・山科・滋野井・古澗・能札父子・鹿苑寺
章首座・竹田正甫以下八人、予共九人也、夜ノ四時分満シ
申候。

『日次記』は興行場所、連衆等を記す。この当時、二十三歳の承章は鹿苑寺首座として活躍中であつた。連衆の中には細川幽斎の弟子として、後陽成天皇、中院通勝、三条西実隆、島津義久、松永貞徳、烏丸光広等と肩を比べた阿野実頭の名もみえる。会は夜の四時（午後十時）頃満韻となっている。

同四月七日の『日次記』には、

七日、晴天、(勸修寺晴豊後室土御門有脩女)運松院殿北山鹿苑寺振舞御入候、予被招候故参候、終日遊山ともなり、句韵七冊兩足院へ返申候。

この日承章の母雲松院とともに泰重は鹿苑寺に招待され、終日遊山している。また記事には、兩足院の東銳利峯より拝借の「句韵」本七冊を返却した旨も記す。『日次記』によると、「句韵」は正月二十三日に禁中より泰重に兩足院への遣いが命じられ、二月八日に兩足院より泰重に五冊が届けられ、禁中に差出す。十九日にその内の二冊が返却されたが、二十三日には五冊を上申する。四月二日には七冊が返却される。翌三日には兩足院より新たに五冊届き、上申した。二十四日には二冊返却があり、六月二十二日に都合十一冊が返却された。¹⁰⁾

元和元年九月十日には、土御門久脩の接待記録がある。

十日、晴天、(勸修寺晴豊後室)雲松院殿・(鳳林承章晴豊男)鹿苑寺兄弟伊達讃岐守各振舞ニ家君御呼、終日遊興也、風呂など御爆也、

右の記述では、現在まであまり知られていない承章の兄(元大善院行源という僧)伊達讃岐守が登場する。この『日次記』の記述により、承章の兄五人すべてが明らかとなる。

元和三年三月十七日の『日次記』には、

十七日、壬申、晴、(中略)雲松院殿相渡申候、折節(鳳林承章晴豊男)鹿苑寺参會、詩哥催被申候由、兩人共詩哥一首ツ、讀侍早、

と、鹿苑寺詩歌会に於いて、雲松院、泰重、ともに詩歌を一首詠んでいる。

同四月十三日に、承章は泰重に従って後陽成院に祇候している。承章は、この年(元和三年丁巳)の初めての祇候のようであった。

十三日、丁未、院御所様和哥十首、又色紙十三枚上申候、何にても哥被遊候やうにと申上候、北山鹿苑寺當年御礼致伺公候、予同道申、御盃頂戴被申候、今月晴天、入夜雨洒、

泰重は後陽成院へ、和歌十首、色紙十三枚を献上し、何があっても和歌の道だけは励まれるようにとの言葉も添えている。

この言葉には、前々年の元和元年に徳川幕府より発布された「禁中并公家諸法度」の第一条を踏まえての泰重の言上ではなかったろうかと推察する。しかし、四ヶ月あまり後の元和三年八月二十六日に、わずか四十八歳の若さで後陽成院は崩御する。泰重三十一歳、承章二十五歳の時のことであった。

次には、承章が後水尾天皇時、初めて参内した記録がある。

元和四年閏三月九日の『日次記』には、

九日 戊戌、雨天、從早朝召候、并御番、御前參、御雜談

共也、次鹿苑寺章首座（鳳林承章）初而御礼勸（光惠）修寺弟也、章句被申上、

漢和聯句八句在之候、其以後退出、別殿（實百員子内親王）いつの宮様御殿

行幸、予、鹿苑寺同道仕致同公候、御振舞、其以後又御前

致伺公、狂句・俳諧（諧）數多御座候、別殿御盃御トヲリ、始ニ

天酌、四辻・阿野・富小路・予、忝事候、予外様之故、取

分有難事候

とあり、承章は漢和聯句の章句を詠んでいる。この日の承章の章句については不明であるが、後水尾天皇が承章の章句を認めたとみられる記述がこの後の十七日、十八日の『日次記』に窺うことができる。

十七日、丙午、晴、從禁中北山鹿苑寺漢和章句申上候様ニ

と被仰下候条、畏給候由申上候

十八日、丁未、晴、今日鹿苑寺へ人遣候、上句畏候由來候

と記す。すなわち、十七日に泰重を介して、禁裏より承章へ漢和章句の下命があった。十八日に泰重は鹿苑寺に遣いを出したところ「上句畏候」と承章からの返事があった。

この後、承章は漢和章句の才能を認められたことで、寛永中期から寛文中期（一六三〇～一六六八）頃まで、「宮廷文化サロン」の中心的存在となるのである。

この頃の承章の漢詩の評価を伝えるものの一つに、藤原惺窩（二五六一～一六一九）との交遊があげられる。藤原為経編『惺窩先生文集』巻之五に次のような七言律詩が載せられている。

（次鹿苑寺章禪師詩題）
次韻鹿苑寺鳳林座元試筆二首

乾綱地位攝坤維。出寺吟行奈好奇。詩思熟時禪亦熟。潘

花祇樹樹林枝。

上下東西南北維。月從雪夜是皆奇。晝前刪後詩耶易。

（坐題）
鑿破乾坤梅一枝

元和五年正月に、承章の試筆試韻に惺窩が次韻をおくったものである。残念ながら生前の惺窩と承章の交遊を示すものは、わずかにこの漢詩のみである。しかしながら、承章の試筆詩に惺窩が次韻をしているということは、日本朱子学の開祖であり、近世文芸復興の先達ともなった惺窩の承章への最大の評価といえるのではないだろうか。

なお、二人の交遊は惺窩の死後においても続いている。『隔蓑記』慶安四年（二六五二）九月十二日に次の記事がみられる。

十二日、於林光院、有齋。被請、予赴林光院也。妙（藤原惺窩）壽院勝歛先生三十三回忌也。僧衆拾一人也。予焼香被相頼也。

さらに、二十八日には追善作詩をしている。記事には、

廿八日、(前略) 赴下冷泉爲景朝臣、(藤原惺庵) 惺齋公三十三回之追善拙詩令持参也。

とある。¹³⁾ 二十八日の記述に「下冷泉爲景」とあるのは、惺窩の嫡男であるが、爲景のことは後述するとして、稿を例の章句に戻そう。元和四年閏三月二十二日に、承章は章句のことを泰重に相談する。同日の『日次記』には、

廿二日、辛亥、晴、北山鹿苑寺章仕、予ニ為談合被来候条、則長橋御局へまで同道申候て御披露申候處、中御門宰相御使、上句相定、則一巡懷昏被上候也、御局御出合候て大御酒、事外御しひ候故沉醉申候也、

とある。泰重は承章と連れ立って長橋の局に出かけ、章句を見せているところに、中御門宣衡からの使いが来て、上句は一巡懷紙に決定したとの報告をうける。後は慣例の如く酒宴があり、勧められるままに大酒となって沉醉したと泰重は記している。

同四月十二日には、禁中より泰重を介して承章に再巡の命が下される。

八月十一日の禁中漢和聯句会は次のようであった。

十一日、丁卯、雨天、御會漢和聯句、御製和漢共被遊候、予和一句仕候、四吟也、阿野宰相(實題)・鹿苑寺・予等也、執筆阿野少將也、四時分相漫申候、御格子半夜之過、

と『日次記』は記す。この日の聯句会では、天皇は和・漢ともに詠じ、泰重は和を一句詠んだとある。漢和聯句は、天皇、実顕・泰重・承章の四吟で、四時分に閉会となっている。

同十月七日の『日次記』は禁中で歌舞伎見物があり、「北山鹿苑寺召候」と、承章も招かれている。十一月十三日には、相国寺雪岑梵釜主催の漢和聯句会で承章は「漢」方を受け持ったことを記す。同二十九日の『日次記』でも、禁中聯句会で漢句を勤めたことがわかる。

廿九日 甲寅、晴、(中略) 禁中御會之故朝参仕候、主上漢也、西園寺黄門公益卿・中院宰相通村卿・阿野宰相(和也)・顯卿・光西堂・章首座・予、和ニハ近衛殿・西洞院宰相父子時慶卿・時直朝臣、四辻宰相季繼卿、高倉中將嗣良朝臣、以上十二人也、御會半夜過相終候也、

漢句は、後水尾天皇をはじめ、西園寺公益、中院通村、舜岳玄光、承章、泰重であり、和句は後水尾天皇実弟近衛信尋、実顕、西洞院時慶、時直父子、四辻季繼、高倉嗣良である。連衆の半数は、近世初期の文化事情を後世に伝える「日記」等の著

述を残す人々である。

承章・泰重は既述の如くであるが、その他、時慶は『時慶卿記』（原題は『雑略記』）、通村には『中院通村日記』、信尋には『本源自性院記』、そして、後水尾天皇には『後水尾院日次記』があり、実蹟は『阿野実顯等歌道消息』の歌学書が、それぞれ残されている。

なお、この日の事は『時慶卿記』の同月同日条にも次のように記す。

廿九日、天晴、日暖ニメ又寒、一、公宴漢和御會參勤候、初タル御人數也、西園寺中納、光、鹿苑寺、中院宰相、四辻宰相、高倉、土御門中務、予、阿、時直、陽明御參、已上十二人、也、夜半過前ニ滿、泰重申而云学星ト云客一出ト、則見ヘ大ニメ光多カラスキ、ニ隨。式間計間有テ在、（略）。

底本にも「雑略記」とあるように、断片的で大概な内容はやむをえないとはいえ、人称の省略等もはなはだしく、参会者の全容も『泰重卿記』により、ようやく判明する。

元和五年二月八日には、国母近衛前子（中和門院）が鹿苑寺を御忍びで遊山された記事があり、同十九日には、女院御所（新上東門院）から、承章と泰重に招待があった。同二十七日には禁中聯句会が催され、承章も参会したが、特筆すべきことは

ない。

同年十一月十四日の『日次記』には既出の承章の兄伊達讃岐守の訃報を記す。

十四日 癸巳、晴、勸修寺連枝伊達讃岐守死去也、家君之甥也、鹿苑寺來入、力落之由申入候、家君、予無忌、姑又姉妹之子無服旧記ニ有之也。

「力落之由申入候」と承章の愁嘆の言葉を副えている。

以上、『泰重卿記』第一に取材して、承章二十三歳から二十七歳までの動向を考察した。

鳳林承章は二十六歳で宮廷文化サロンへのデビューを果たし、漢和聯句の才能を後水尾天皇に認められるに至り、以後半世紀における後水尾天皇との交遊が続けられる。しかし、それには従兄土御門泰重の厚い支援が根幹となっていることは改めていうまでもない。

(三)

次には、承章二十八歳から三十二歳までの動向について、引き続き『泰重卿記』第二（『史料纂集』113、続群書類従完成会、平成十年）からさぐってみる。

『泰重卿記』第二における承章についての最初の記録は、元和六年九月十三日である。

其入程折用意仕、其上銘にへうなわと書付申候、持参西刻
伺公仕候、頓而始候、主上（中和門院前子（聖秀女王）（文高女王））・女院・曇華院殿・大聖
院殿・孝勝院殿・近衛殿左府・青蓮院殿・資胤卿（益純）
大納言・季宣卿（宣季）（鎮山尊良）同・實有卿中納言・季繼卿同・宣衡卿同・
通村卿同・之仲卿三位・嗣良朝臣・予・章西堂（四辻）鹿苑寺（勸修寺）
光豊卿弟、各車座相并居、御香焼物也、火本ハ万里小路入道也、
七炷之衆實有卿・嗣良朝臣・章西堂、予三炷也、三人御懸
物見取也、其次鬪取也、章西堂上様之拜領、長持ニ五色之
巻物とんす五巻也、御銘ハ女さうそくとある也、五きぬと
いう御心なるよしうけ給候、女院御所白き御小袖一重嗣良
朝臣拜領也、さや二巻近衛殿・實有卿拜受也、其以後事外
大御酒也、

この日、僧籍にある者は承章のみである。ここでも承章の名に「光豊弟」と泰重が記すのは、勧修寺家の一人として参会しているということを強調したいがためであらうか。

十炷のうち七炷を聞いたのは、承章、正親町三条実有、高倉嗣良の三人で、泰重は三炷であった。七炷の三人はそれぞれ籤引で懸物を賜る。天皇の懸物、銘「女さうそく」（装束か）という長持入り五色緞子五巻は承章、中和門院の懸物、白小袖一重は嗣良、近衛信尋の紗二巻は実有がそれぞれ引きあてた。懸物に思案したあげく、折箱入りの水引三百把、銘「うなわ」（鵜縄か）の泰重の懸物については記されていない。何らかの

理由で記し忘れたのであろうか。

同二十三日の禁中聯句会の御連衆は、十四人のうち十二人までが僧籍で、これは前年十一月二十七日と同様である。『日次記』に、

廿三日、御聯句卯刻始也、申上刻二相漫也、供御兩度被下候、僧退出之時杉原十帖、銀子貳枚ツ、各拜領也、忝候由被申候、其以後退出也、予御番之故後又召御前、今日之句共御穿鑿有之也。

と、会は卯の刻（午前六時）に始まり、申上刻（午後三時）に満韻となった。この間、二度の食事があり、退出時には承章を含む僧籍衆には杉原十帖、銀子二枚宛が渡された。「忝ないこと」とであると『日次記』は記す。この日の聯句会は大成功であったことが、退出時の有様から窮える。また、禁裏当直であった泰重は、天皇とこの日の聯句について、共に吟味したとある。

八月二十八日の聯句会も僧衆は承章を含む九人で、公家は、泰重、西園寺公益、右大臣一条兼遐の三人で、申上刻に満韻となっている。承章は、右大臣一条兼遐とはこの日初めて同席であったと『日次記』の取材から推察できる。¹⁵⁾この兼遐主催の聯句会が、同十二月九日の『日次記』に、次のようにある。

九日、丙子、晴、今朝從番所退出、さかやき、飯後伺公、

少遲参仕候、各朝参被申候、御會頓而相始也、午時主上出御、御聽聞、晚二句御製有之、僧衆御製承度由依申如此候、左右方共御製玄妙之由被申候也、公家衆ニハ、(一條兼遐)右大臣殿但此度御催也、西園寺大納言殿・高倉嗣良朝臣・予・僧衆(兼遐)暁長老・柔長老・章西堂・光西堂、以上八人御連衆也、初夜過相終也、

と、天皇は午時（正午）に出座、この日は聴聞の予定だけであつたようである。しかし僧衆達の「御製」懇願により、晩方に「二句」詠む。その二句とは、ともに「左右方共御製玄妙之由被申候也」と評するものであつた。この日の漢和聯句は『連歌合集』（『大日本史料』十二編、元和七年年末雜載所収）に聯句総てが掲載されている。全句を紹介したいが、紙面の都合上句数のみを紹介しておく。

詠者	句数	詠者	句数	詠者	句数
听叔顯暉	15	一条兼遐	11	鳳林承章	12
剛外令柔	14	西園寺公益	11	舜岳玄光	12
高倉嗣良	11	土御門泰重	11	平松時興	1

右の表には、『連歌合集』の62番の平松時興の一句を『日次記』には記していないが、掲出した。この一句に後水尾天皇の二句を加えて百韻となっている。

元和九年四月十日にも一条兼遐主催の聯句会があり、この句会には、前出の平松時興の名がみえる。『日次記』には、

十日、庚午、晴、午時少雨天也、(兼遐)一条殿御聯句御會、早々伺公仕候、辰刻許御會始、一条殿御遅参之故也、御連衆、一条殿・鷹司殿御方御所・西園寺大納言殿・花山院宰相・時興朝臣・予・僧衆暁長老・章西堂・勝西堂・(兼遐)雪峯梵峯・(兼遐)西堂、以上十人也、予大章句申候、物換也奇―夏予緑陰表―出藤同、對句間―餘訂校、曆梵、牡丹茂昌棚同、此分歟、實不覺候、及夕陽相終也、

とある。兼遐の遅刻で、会は辰の刻（午前八時頃）に始まつた。泰重は章句を詠み、それに梵峯が對句を詠んでいる。しかし、梵峯の句については、「実はよく覚えていない」と泰重はいう。残念ながら、承章の句についてはこの時のみならず『泰重卿記』を通して知ることができない。承章の句については、前述の『連歌合集』の他は『隔蓑記』を待たなければならない。

次に、元和十年（三月に寛永と改号）二月四日の『日次記』には、禁中能興行の様子が窺える。

四日、戊子、晴 朝食相開早々朝参、公家衆不殘御参候、攝家・親王・宮門跡御参、御能始也、御振舞之御造作ハ、從御所之御沙汰之由承及候、伊賀ハ大夫方之事計肝煎之由

承及候、無理なる御申沙汰之由世間風聞有之也、大夫ハ
八候殿御内衆大膳、又太郎八、又澁屋末子与吉郎・同孫
權三郎等也、五山衆保長老・益長老・良長老・章西
堂・光西堂・勝西堂・銚西堂、玄琢伺公申候、御能十
一番也、キリ老松澁屋紀伊守ツカマツリ候也、庭上無事珍
重也、未刻雨降。

と、能会は、禁裏の命令で板倉勝重が催したことがわかる。また、泰重は、この日の板倉勝重の大夫方への気配りを見るにつけ、「この能会のこと、大夫方に無理をいったとの世間の風聞があるが……」と言葉で噂を肯定していることが記述に汲みとれる。

この頃の能大夫の位置について、堀口康生氏は、「元和・寛永の頃の渋谷は、どうやら一能役者にとどまっていけない位置を占めている」と、「手猿渋谷の二百年」(後)の中で述べるが、右の『日次記』での板倉の態度においても、そのことは証明されよう。

能は十一番あり、最後は渋谷紀伊守の「老松」でしめくくられている。

寛永元年八月十五日には、禁中詩歌会の記事がある。

十五日、丁酉、晴、午時雨降、飯後伺公朝ハ行水神事如常、今日依為明月詩哥會有之也、御人數次第不同、關白殿・

(好二親王) 三宮・三條西、中御門大納言・平宰相・水無瀬前宰相・
(時惠) 平三位・飛鳥井・冷泉・平松・予・暁長老・章西堂・
光西堂・勝西堂、題三十首飛鳥井、次第公家衆取早、其以後五山衆取被申候、着座之時如此候、公家衆末座予也、予以後暁長老被着座候、三條西依下知如此候、月前露と云題候、予詩、雨洗ニ大虚雲ニ霧過ク、玲瓏ニ鬼影似磨礎、露中月明千億、占盡一籬如ニ脆何、申刻許二首作出、長老衆談合、無指導、清書直参、窺叡慮、秉燭之時各伺公、よミあけ有之也、時興朝臣、

と『日次記』は詳述する。この日の明月詩歌会の「題」は、「月前露」と三条西実条が告げる。ここでも泰重の詠歌は知れるが、承章の詩歌は、既述の通りやはり不明である。詩歌は清書の上、叡覧があり、平松時興により読み上げられたとあるが、全員のものか、そうではないのか『日次記』からは判断しがた

い。以上、承章二十八歳から三十二歳までの交遊等の記録を垣間みてきた。聯句会、詩歌会、歌舞伎、能等の禁中での興業に、承章はかなりの参会をしているが、そこには、御土門泰重との交遊と深く係わり、結びついていたことは明らかであろう。

(四)

次に、承章三十三歳から四十歳までの動向について、尊経閣

文庫蔵・貞享四年写本『泰重卿記』¹⁸の記述を踏まえ、検証してみる。

寛永二年五月八日、承章はいよいよ鹿苑寺独住第二世、すなわち長老となる。このことについて『日次記』には次のようにある。まず寛永二年四月十七日に、

十七日、乙未、晴時々雨（中略）相國寺章西堂來月廿八日入院之由、承及候、珍重之由、

とあり、承章の入院を聞き、泰重は「尊いことだ」と慶びを述べている。翌五月二十八日の『日次記』は、

廿八日、乙亥、晴天、家公終日居申候^{（久修）} 鹿苑寺入院、天氣晴、珍重也、事ニ相調之由承及候、満足也、

と、泰重は承章の入院が滞りなく行われたことに、前述同様、「珍重也」と記し、「満足也」とまで云っている。時に承章三十三歳の時のことである。

八月二十四日には、承章の母雲松院が死去する。『日次記』には次のように記す。

廿四日 庚子、晴、請取御番伺候、御對面、御所ニテ御物語共有之最中、小川坊城呼立也、雲松院死去之由承及候、

予、即時參候、絶命之由、皆愁歎悲候事也、

禁中での「物語」の最中、坊城俊完から知らせを受けて泰重はすぐに馳せつけたが、すでに雲松院は絶命していた。一族、歎き悲しみにくれていることを伝える。

次には、九月八日に飛鳥井雅宣から承章と泰重に振舞の招きの記述があるものの、それ以後の『日次記』には、寛永七年（二六三〇）十月十八日の記述まで、承章及び鹿苑寺の文字の確かな動向は窺えない。¹⁹

さて、十八日の『日次記』には禁中能会の記事が、次のようにある。

十八日、甲子、晴、早朝御能始候、外様内々、院中ニハ殿上人不殘也、此外章長老・松橋僧正師弟子 院子二人、啓迪庵、式三番、難波・田村・江口・藤栄・船弁慶・張良・三輪・融・呉服きり九番也、

参会者は公卿は残らず、僧衆は承章と松橋僧正、同弟子二人、及び啓迪庵と記す。能は式三番の後、九番あり、最後は「呉服」が演じられているが、大夫は誰であったのかは、不明である。次に、寛永九年正月十一日には、

十一日、巳酉、雨天、今夜懸物語香、銘はハなのふすまかま

しき紙五束 折ニ入て持参、御人數 近衛殿・一條殿・

高松殿・鷹司殿・御内大臣・聖護院殿・中御門大納言・阿野中納言・園宰相・勸修寺宰相・高倉三位・予・

冷泉中將・花園少將・岩具少將・鹿苑寺長老、十六人也、

八人宛ニ組ニ反ツ、也、一條殿御手柄十六炷也、

と、禁中「懸物香」の様子が記されている。

泰重は、またしても銘に思案しているようである。一条兼遐の十六炷とは、全部的中ということであろうか。残念乍ら、承章の懸物及び成績等は右の記述からは明らかにしがたいが、承章の懸物香についてわずかながら、概観できるものがある。前出の元和七年二月二日の禁中懸物香に於ける記述には、七炷的中であったことは既述の通りである。他にも『本源自性院記』に唯一窺える承章の記録は「懸物香」である。紙面の都合上、原文は割愛するが、大筋は次のようなことである。

寛永七年正月二十一日条に、参加人数は十一人、承章は懸物として、茶道具、鯛八十一本、大字一冊箱入を持参している。成績は、四辻季継の八炷が最高で、つづいて一条兼遐の七炷、承章と高倉永慶の六炷であった。二、三の例からは言明しがたいとしても、これ等の調査から、承章は「聞香」は得意で、成績は、常に六割以上の確率であったといえる。

寛永九年正月十六日を挟んで、禁中で大掛かりな詩会があったことが『日次記』でわかる。その中で、承章の名のみえる同

年正月二十日の記事を紹介する。

廿日、戊午、晴、飯後御番伺公候、從相国鷹鶴進上、日野

大納言北面所迄持参也、予・請取披露申候、西園寺前内府、

水無瀬前中納言詩被渡、叡慮候、予披露申候、及黄昏、

於小御所、御人數、鷹司内府、西園寺前内府・水無瀬前中

納言・平松少納言・予・姉小路・阿中將・図書頭季通・

勘解由次官不出座、兵部大甫・花山院大納言、法中、随

庵・章長老・勝西堂・峯西堂・御製、以上十五人、讀師阿

中將・為景朝臣、御製三反、其以後羹物、ささいり御吹物、

御酒盃數行、水無瀬迄御前にて御相伴、長老・兩西堂・

予・時庸朝臣・為景朝臣等、次間ニテ羹物、吹物等飲食、

其以後御通罷出、各御前侍候也、

詩会は十六日から二十日までの五日間で、詩題は「梅柳争春」及び「梅百春友」二つであり、延人数四十四人というものであった。

ところで、右の『日次記』に為景朝臣と表記される人物がいる。尊経閣文庫蔵本では、初出の箇所「為景」(傍線①)と肩注がある。しかし、「公」が公景であるとする、「日次記」に泰重の次に記す「姉小路」は一体誰を指すのであろうか、『公卿補任』によると、姉小路家はこの公景(実父は阿野実頼)が寛永九年に再興している。

そこで、筆者は「為景朝臣」と記すのは下冷泉為景のことだと考える。為景とは既出の藤原惺窩の嫡子であることは既に述べた。尊経閣文庫蔵本『日次記』には、後出の為景朝臣（傍線②）には肩注はない。このことはどう考えるべきなのか。いずれにしても、いまだ少し調査、検討の余地を残すが、注目すべき記述である。

為景については、市古夏生氏はその著『近世初期文化と出版文化』第六章「冷泉為景とその周辺」の中で、承章と為景の交遊は、「寛永十四年四月十四日^{マツ十日}に清閑寺共房、高倉嗣良と共に、為景も鹿苑寺茶会に招かれた記録があるだけで、他には全く両者の交遊を示すものはない」と、『隔蓑記』を踏えて述べている。しかし、泰重の『日次記』が既述通りであるならば、承章と為景の交遊の記録は、これが最初の記録といえるのではないだろうか。

(五)

最後に、次に来る『隔蓑記』時代の「宮廷文化サロン」の水準を窺う手がかりとして、今少し、『隔蓑記』の中から記事を選び、みてみることにする。

寛永十三年五月十五日に次のような記事がある。

十五日、三百韻、自丑刻、終申刻。近衛殿下江ハブタヘノ絹十疋被進之。連衆十二人金子乗^レ臺ニ各之前頂戴。則冠

者持臺、而退也。右三日之内、一百韻……之間御菓子出。

其外休息之間ニ又御菓子出。以上三日之内之御菓子三十三

種也。發句之次第、第一霞^{（信尋）}、第二春雨

種^{（實顯）}也。發句寒句、第三花^{（信尋）}、第四時鳥^{（信尋）}、第二春雨

御製^{（阿野前大納言入韻、漢和）}、第三花^{（信尋）}、第四時鳥^{（信尋）}、第二春雨

第五納涼^{（勸修寺中納言、漢和）}、第六萩^{（國宰相、金孝哲）}、第七月^{（阿野前大納言、漢和）}、第八鹿^{（高倉三位、漢和）}、第九霜^{（光勝入韻、漢和）}、第十雪^{（岩倉少將、漢和）}。御連衆十四

人御・近衛殿下・阿野前大納言^{（實顯）}・滋野井中納言^{（季吉）}・勸

修寺中納言^{（廣經）}・園宰相基音^{（和）}・高倉三位^{（嗣良）}・昶叔^{（老）}・鳳林

予^{（漢中達）}・九岩^{（老）}・泰重朝臣^{（土御門左衛門佐、漢和）}・具起朝臣^{（岩倉少將、漢和）}・光勝^{（老）}・梵峯

以上十四人、執筆兩人逸定^{（兵部大夫、漢和）}・季通^{（勸解由、漢和）}。追加面八句也。

執筆吟聲・發句〔漢九岩作〕前廉被仰付也。入韻左京大夫、

是ハ連外也。侵句第三逸定執筆、第四季通、第五近衛殿下、

第六御製、第七阿野大納言、第八滋野井中納言、追加八句

終、入御。各有御振舞、了而退出。此中六日之間勞身、千

苦萬辛。歸院、而休息。（後略）^{（2）}

と、記事は、仙洞御所に於いて催された千句会のことである。

この日、満韻となったが、それまでの経過は以下に記す通りである。

まず、四月二十九日に、承章は近衛信尋を訪ねて、来る千句会の一巡について相談をしている。記事には、「仙洞御千句之一巡之次第、御相談、伸愚意云々」とあり、承章も積極的意見述べている。五月に入ってから、六日に千句のことで祇

候し、十日には仙洞に一泊して、丑刻より千句の一巡を決めている。翌十一日に順定し、承章は、巻頭の入韻と決まった。十二日には仙洞で休息をとる。十三日はいよいよ始まり、三百韻が済む。翌十四日には四百韻が済んだ。十五日の記述は前述の如く、三百韻が終了したのは申刻、すなわち、午後四時であった。近衛信尋には羽二重十疋、後の十二人の連衆には金子五両ずつが下賜された。金子は、各自の前に冠者が、一台、一台に乘せて運ぶというものである。また、三日共、百韻が終わるごとに、これも、それぞれの前の盆に、三種類の菓子都合十回配られ、休憩中にも菓子がでている。三日間を通して三十三種類^(註6)の菓子が出たと記事にあるが、これらのことは、千句会の進行状態が円滑であり、結果も大成功で終了したことを物語るものである。また、「此中六日之間勞身、千苦萬辛」と承章は記しているが、この六日間の承章の動向は、すでに承章が「宮廷文化サロン」に於いて、不可欠の人物であることを証明しているといえよう。

おわりに

以上、『隔莫記』以前の鳳林承章について『鹿苑日録』、『泰重卿記』、及び、同時代の、二、三の公家日記等に、若干、『隔莫記』の記事を見合わせながら検証をこころみた。

『鹿苑日録』からは、幼年期から青年期まで、禅僧として修行する傍らで、公家勸修寺家の一人として、文芸に親しむ様子が

窺え、未来の承章を彷彿させる記事を見ることができた。また、他の喝食とは明らかに違う待遇を受けていることも汲みとれる。(注(6)) これらのことについて『相国寺史料』第一巻の「相国寺史稿」に注目すべき次のような記録がある。

鹿苑寺之儀ニ付申合條々

一、喝食衣裳・御乳・小性^(姓カ)・小者賂・以從寺家之合力、從

此方可申付候、其外諸事不可有疎略事、

一、小性^(姓カ)一人、小者一人、在寺之時付可申之事

一、喝食當年七ツニ候、十八歳ニ成候者寺並寺領、可有御

渡之由、心得中之事

一、毎年参拾石、本寺相國寺へ為末寺分御渡之由、心得申

之事

一、山林一切伐申儀在之間敷候、喝食來年入寺候者、讀書

萬可然様ニ頼存候事

慶長四年己亥

(勸修寺)
晴豊

十月十五日

在判

大光明寺

右は、承章入寺に際して勸修寺晴豊と西笑承兌の間で取り交わされた契約書である。

それには、入寺の時の、乳母、小姓、賂人の事に始まり、十八歳の成人後に住持となること、その節の相国寺への上納の石

高、また、承章が住持となるまで鹿苑寺の山林の伐採の禁止、さらには学問への依頼に及んでいる。まったく手ぬかりのない契約書といえよう。『相国寺史料』に於いては、他に類をみないものである。すなわち、幼少の承章に対する『鹿苑日録』での扱いの重さ、『泰重卿記』の中で、事あるごとに、承章のことを勧修寺の出自であることを記しているが、このような契約書と無関係ではあるまい。

本稿は、『泰重卿記』に寄生することが多大であることは既述の通りである。すなわち、『隔莫記』以前の鳳林承章の文化的動向には、土御門泰重の存在が大きく関与していたことをここに改めて強調しておきたい。

注

- (1) 辻善之助編『鹿苑日録』第一卷（昭和九年）～第六卷（昭和十二年）続群書類従完成会。
- (2) 「尊丈」とは、禅宗で、食事をつげる役目の修行僧「喝食」の称号である。（『運歩色葉集』^{（原本）}元龜二年（一五七二）臨川書店一九七九年）一五四頁による。
- (3) 勧修寺晴豊（一五四四～一六〇二）には『晴豊記』、光豊には『光豊公記』の著述がある。共に武家伝奏として、当時の政局に密着する位置にあり、朝廷と幕府の動向をみる上での貴重な史料である。『晴豊記』は『続史料大成』第九卷に『晴右

記』と共に所収、臨川書店、一九七九年）死亡年月日も『晴豊記』解題三頁による。

(4) この日の光豊の持参品は、後に承章の財産となる。（『相国寺史料』第二）一八八頁。

(5) 前年に「阿国踊り」が始まったところで、若衆歌舞伎の成立もこの後二十五年後のことである。この日の少年衆は記事にある如く、五条周辺での大道芸衆であったと推察できる。

(6) 席順は左記に示されている通りである。

次第 二列。	公	仙公	實位慈照（有節端保）	章公尊丈	鹿苑寺之	立公	南

次第 二列。	主位豐光（西笑承兌）
-----------	------------

『鹿苑日録』四十三「第四卷」一五八頁参照。（ ）は筆者注記

(7) 秉弘（ヒンボツ）は、禅宗で一寺の首座の住持に代って法子をとり首座を占め、法座を開筵することである（神保如天、安藤文英編『禅学辞典』正法眼蔵註解全書刊行会、昭和三十三年）。

(8) 「日用集」の存在については、既に、吉村享氏『「隔莫記」にみる茶師の動向』（上）（京都文化短大紀要）の中で、承章の日記には現存のものとして『隔莫記』と『日用集』の二種類が

あると指摘されているが、承章にはもう一冊、『鳳林和尚朝参之記』（鹿苑寺蔵、明治二十年写本）がある。

- (9) 光豊の一子、教豊もまた三年後の慶長二十年六月廿二日に五歳で死去する。その日の『泰重卿記』には「^{教豊}勸修寺死去、五才、跡絶早」と記す。しかし、泰重の杞憂も、承章の兄坊城俊完の息経広が勸修寺家を相続（元和元年十月十二日のことか）して、権大納言正二位まで昇ったことで解消する。（正宗敦夫編纂、校訂『諸家傳』上、自治新報社、昭和四十三年）五二一頁。

- (10) この辺の事情について、長友千代治氏は「この頃禁中では『集句韻』の諸本調査をしていたらしい」（『日本古書通信』平成一〇年二月号「朝廷文化サロン—泰重卿記—」）と指摘されている。

- (11) 太田青三郎他編『藤原惺窩集』（思文閣出版、昭和十六年）。

- (12) 右同頁、前掲に、「和正意戊午歳旦二首」とあるところから、承章への次韻もこの年と推定する。

- (13) この時の追善詩については、『追遠雜誌』に次のような七言律詩がある。

三十三霜真一夢 追懷昔日入芳蘭
南別外海角晨昏靜 北肉山頭天地寬
千載高各君子德 一團和氣旧時看
至今依深蘋蘩露、向左辺花淚未乾

鹿岩鳳林す承章蒲捌

右は、（藤原惺窩三三回忌「慶安四年」録、和田英松所蔵『追遠雜誌』明治三十九年影写本）による。

- (14) 注（9）『諸家傳』六一八頁参照。頼豊（改俊^{すけ}元）とある。

- (15) 泰重は、国母中和門院の信頼が厚かったとみえ、一条兼退、一条院宮の読書師範となっている。そのような関係から、兼退（『隔冥記』時代には、改名後の昭良）の記述はかなりの数にのぼるが、この日まで承章との同席の記録はない。

- (16) 堀口康生「手猿渋谷の二百年」（後）（『芸能史研究』四十二号所収）なお、『隔冥記』時代にも、後水尾院を目見えて、渋谷父子と承章の交遊も多い。

- (17) 渋谷紀伊守については、与吉郎の受領名と考えられるが、堀口康生氏は、「与吉郎」は慶長十年以後は確認できないので第一線は退いたのであらうと述べる（注（16））。また、慶長十年頃には、子の与兵衛が紀伊守を受領したという。「与吉郎」の名も襲名したのであらうか。

- (18) 校注については、『史料纂集』95『泰重卿記』の凡例に準じた。

- (19) 『泰重卿記』（尊経閣蔵写本）は、寛永四・五・八・十・十八年が欠けている。なお、元和八年も欠く。

- (20) 『本源自性院記』（『史料纂集』50、一九六七年、続群書類従完成会）六一頁参照。

- (21) 『公卿補任』寛永九年^{壬申}による。

- (22) 『近世初期文化と出版文化』（若草書房、一九九九年）一四〇頁。もっとも、市古氏のいう「本格的な交遊」という意味で

は、この一例では証明しがたい。

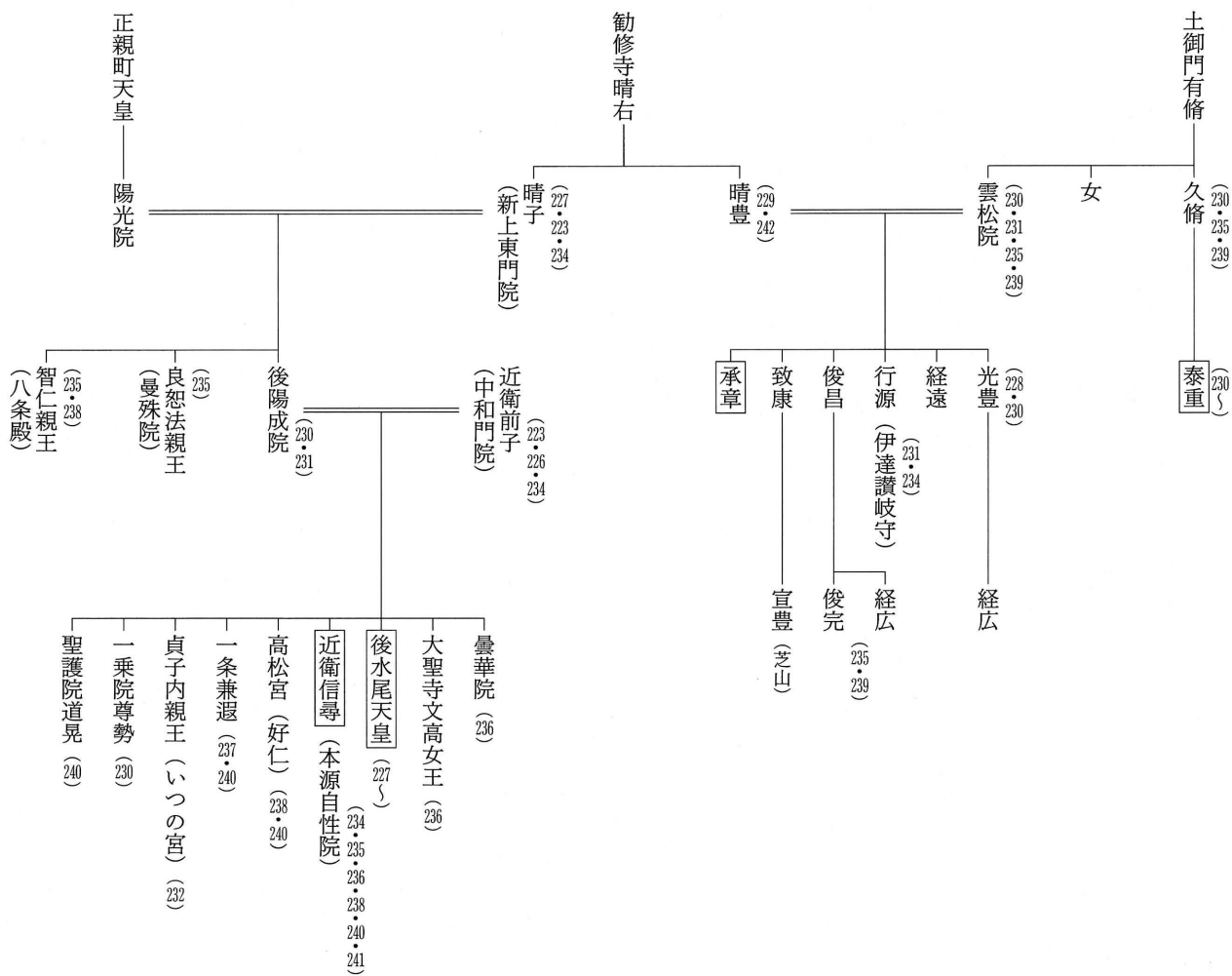
(23) 続けて、それぞれの句が次のように記されているので、紹介しておく。

浪風もかすむやいく世四の海前關、施、澤聖如、春、承章、第二
 くみあれや豊葦原の春の雨阿野前、千峯無雪残、御製、第三
 御製入韻 鶯前關、第四 百聲にあくる夜もかな時鳥滋野井、窓深新、入韻
 入韻 鶯白、第五 緑重九岩、第六 すゝしさや千年もなれん松の陰勸修寺、臨池數、入韻
 點螢朝臣、第七 もとのあらしの萩もなし園幸、野雲啼破鴻、入韻
 光勝第七 簾波流映月、入韻 阿野大納言第八 鹿の音に遠山ちかし
 高倉入韻 霧口村戸開梵峯、着、二、隕、霜聲、葉、光勝、半、天、井、中、納、言、第十
 言、雪の色さながら玉のみきり哉具起、朝臣、倚欄寒景搜、听叔、入韻

(24) 百韻を一座で十巻続ける句数千のもの。百韻とちがって全体を通しての指合、去嫌(前句に用いられた同季・同字、類似語・縁語を付句や近接した句の中によみこむことを禁止し、一定の句を隔てて用いることを決めた法式)がある。

(25) 藤岡大拙、秋宗康子校訂『相国寺史料』第二巻(思文閣出版、昭和五十九年)一八九頁。

「系図1」



「系図2」



(『本朝皇胤紹錄』『諸家傳』による) () は本文頁

『隔實記』以前の鳳林承章略年譜

年次	西暦	年齢	事蹟	典拠
文祿二	一五九三	一	生誕	『相国寺史料』
慶長四	一五九七	五	西笑承兌と父勸修寺晴豊入寺契約	
五	一六〇〇	八	鹿苑寺喝食となる	同
六	一六〇一	九	『鹿苑日録』に初出	『鹿苑日録』
七	一六〇二	十	父晴豊死去	同
八	一六〇三	十一	相国寺神事能に出る	『諸家傳』
九	一六〇四	十二	円光寺にて少年「躍会」見物	『鹿苑日録』
十二	一六〇七	十五	某僧と飲酒	同
十五	一六一〇	十八	西笑承兌遷化	同
十六	一六一一	十九	雲興寺雅会にて沈酔	『相国寺史料』
十七	一六一二	二十	鹿苑寺に幕府より安堵状	同
二十	一六一五	二十三	乗弘遷寮	同
			兄光豊死去	『鹿苑日録』
			一乗院漢和聯句会	『泰重卿記』
			雲松院（承章生母）、土御門泰重を	
			鹿苑寺に招く	
			同9/10には土御門久脩、雲松院、	
			兄伊達讃岐守を招く	
元和三	一六一七	二十五	鹿苑寺詩歌会	同
			後陽成院に祇候	
			崩御	
四	一六一八	二十六	後水尾天皇に初参内	同
			天皇より章句を命じられる	
			再巡の下命	
			父晴豊鹿苑寺齋会に相国寺（万年山）より	

元和五	一六一九	二十七	追懷頌を受ける	11/8	『鹿苑日録』
			国母近衛前子（中和門院）		
			苑寺へお忍び遊山	2/8	『泰重卿記』
			女院御所（新上東門院）に招待を受け		
			る	2/19	
六	一六二〇	二十八	禁中漢和聯句	8/11	
			相国寺雪安・梵室主催の漢和聯句	11/13	
			伊達讃岐守死去	11/14	
			師西笑承兌十三回忌（鹿苑寺齋）	12/5	
			禁中にて文英・清輝・東波・十四聯講	9/13	
			禁中聯句会	11/27	
			土御門久脩・泰重、雲松院、坊城俊完		
			振舞	12/11	
七	一六二二	二十九	禁中懸物香	2/2	
			同 聯句会	2/23	8/28
八	一六二二	三十	伏見殿（邦房親王）葬礼に尊茶	2/10	
九	一六二三	三十一	一条兼遐主催聯句会	4/10	
			將軍秀忠より二条城において時服		
			を賜る	8/2	
十	一六二四	三十二	板倉勝重禁中能興行	2/4	『相国寺史料』
			禁中名月詩歌会	8/15	
寛永二	一六二五	三十三	相国寺入院歴代九五世となる		
			母雲松院死去	8/24	
			飛鳥井雅宣より招待有り	9/8	
三	一六二六	三十四	瑞春軒雪溪兼松に「問禪法語」を作製	4/	
六	一六二九	三十七	家光より時服を賜る	9/16	『相国寺史料』
			桂光院（八条智仁）葬儀に尊湯	4/19	『鹿苑日録』
七	一六三〇	三十八	後水尾天皇讓位	11/1	
			近衛信尋 懸物香	1/21	
			禁中能会	10/18	『本源自性院記』

十二	十一	十	九	寛永八
一六三五	一六三四	一六三三	一六三二	一六三一
四十三	四十二	四十一	四十	三十九
記事 4 / 15	養源軒雲峰需公首秉弘一会に指南	鹿苑寺聯句会 11 / 10	鹿苑院僧録職の復旧を幕府に申請 受け入れられず却下	富春軒にて聯句会 11 / 18 禁中懸物香 1 / 11 同 聯句会 1 / 20 国師追悼和韻 4 / 16 家光に二条城にて拝謁 7 / 16
『鹿苑日録』		『相国寺史料』	同	『鹿苑日録』